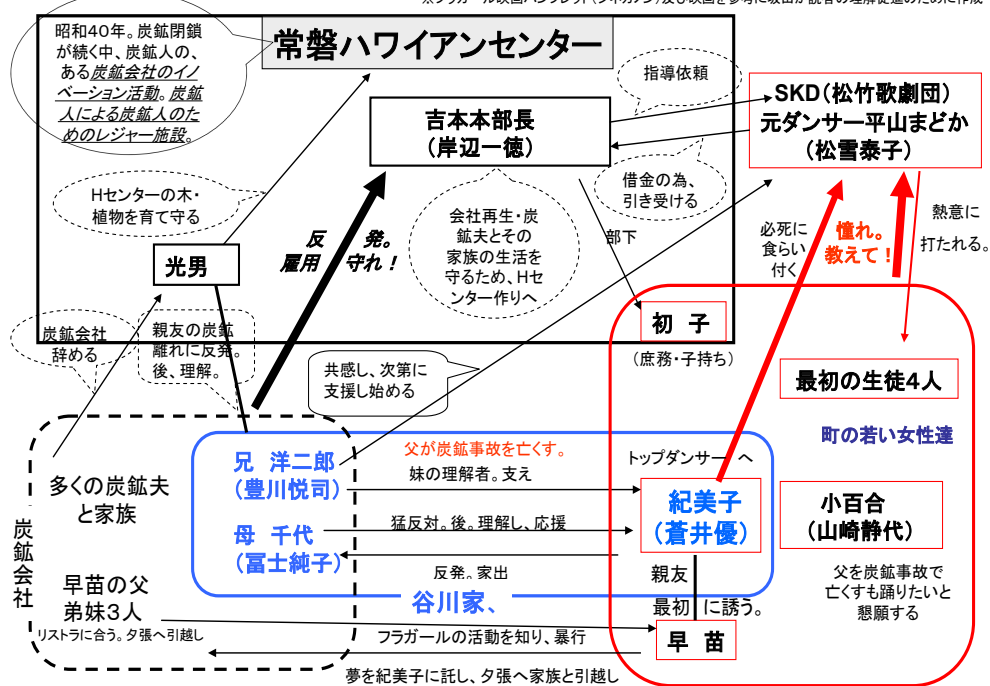


題材映画は 2007 年日本アカデミー賞を受賞し、大ヒットとなった『フラガール』。

【フラガール: 主な登場人物関係・背景】

※フラガール映画パンフレット(シネカノン)及び映画を参考に坂田が読者の理解促進のために作成



映画で語り合う 風景 一部再現

C:「僕はこの映画のテーマは“自立”がテーマかなと思いました。母親の千代が荷物を届けてきたときに主人公の紀美子が、踊りをいったんやめるんですね。あれほど反対していた母親に見られても、一瞬動きを止めるもすぐに再開し、踊り続けるシーンに僕は一番感動し、号泣しました。このシーンは、自分の生き方をこれから新しく手探りする中でも、親にも認めて欲しいし、自分自身もこうしていくんだ!という強い決意のようなものが感じられて感動しました。」

E:「早苗と紀美子の対比も面白いよね。早苗も紀美子も親の反対があったけど見事に対応が分かれた。母に反対され、頬をぶたれた紀美子は母に反発し、“これからは女も堂々と働く時代や。私の人生は私で決める!”と家出しても意思を通そうとした。自分の意思を強くもって通すところは凄い。逆に、早苗は父親がリストラになって、父が激昂し、叩かれた。それからあれほどダンサーになりたいという夢もあきらめ、断念してしまった。」

A：「それは家庭環境の違いも大きいかもしれない。早苗は母がいなくて、弟妹三人の面倒を母代わりにする必要があった。一方、紀美子は兄の支援や母の愛情と隠れた理解があった。この違いは大きい。**支援者の存在、特に家族（両親）の態度は大きいよね。見守られているという実感は子どもに勇気を与えてくれるからね。**」

A：「僕は初子ね。メガネをつけたままのときは垢抜けしていないなと思ったのね。それが踊り始めたら可愛いと思ったし、イキイキワクワクしていて一番変化を感じたのね。Cさん、Eさんは自分の意思を通す姿に感動したと言っていたけどね。僕は少し視点が違うのね。初子は職場の事務員で、上司がハワイアンセンター設立するものだから、仕方なしにダンサーに応募させられたわけね。本人の意思で応募したわけでもないのに、初子が結果としてイキイキしているのに面白さを感じた。望んでいるわけでもない方向に人生なりに仕事が変わっていくというのはよくあると思うけど、映画でも早苗が最初に「是非、行きたい」と親友の紀美子を誘っても、紀美子はあまり乗り気ではない感じだったよね。その上、お母さんも猛反対するし、兄ちゃんも炭鉱と父への思いがあるから歓迎してくれない。周囲に反対される中、紀美子は早苗の熱意に押される形で友達としての友情をとり、ハワイアンダンサーに応募した。それゆえ、先生とも最初は衝突することが多かったでしょう。それがいつのまにかハワイアンダンスが誰よりも大好きになって皆をひっぱっていくことになった。

早苗からの誘い、本当に偶然から始まりましたよね。初子にしても上司である吉本本部長（岸部一徳）の下で事務員としてたまたま働いていてその縁で生活のためについていただけだった。自分が主体的に意思をもって動いたわけでもなく、これも偶然だった。その偶然が本人の人生を変えるだけでなく、多くの踊り子を集め、成功させるきっかけとなった。反対にあれほど念願していた早苗が家庭環境のために夢をあきらめた。人生の縮図のよう
で考えさせられましたね。」

B：「この映画はそれぞれの人に関係する人と激しくぶつかり合う中で影響し合っていることが印象的ですよ。平山先生というダンサーという手に職を持ったプロのダンスをみて、紀美子や早苗は影響を受けて人生を変えた。あれほどかたくなにハワイアンダンサーに抵抗していた千代（富士純子）も最終的に子どもたちの旧習にとらわれず、新しいものに挑戦していく姿に未来を託そう、邪魔しちゃいけないと最後は応援し始めた。**お互いの真剣なぶつかりあいの中から知らず知らずのうちに影響を受け行動を変えていったんだよね。**」

（映画で語り合い風景 一部再現 終わり）

////////////////////////////////////

C君は、学生の四回生で今、教員を目指して猛勉強中です。社会に出る前段階での勉強の日々です。ダンスという新しい社会に飛び出て行く前の紀美子。彼はその紀美子と母親の関係、自分の母親と自分の関係を重ねていて、紀美子の乗り越える姿が自分とダブって見えた

ようです。Eさんも最近、病院の秘書を辞めて、キャリアカウンセラーなどを中心として独立し、活動し始めています。これも『女性の自立』という視点で自分を重ね合わせて見えます。彼らは登場人物の生き方を通して感動や憧れを感じていたのです。私は都合のいい考えかもしれないが、映画の登場人物のあるシーンに感動できたら、同じくらい自分にも潜在的可能性（能力）があると考えています。これはナルシスト的発言から来ているというよりも多くの人も同じだと思います。「いいな」と思えることは“自分もそうになりたいな”と少なくとも心の中で考えている筈だと思うのです。映画を通して追体験することで自分の可能性を広げていく。映画はときに日常では体験できないことも追体験として自分の体験することができます。そんな可能性を映画で語ることに感じています。C君は問題意識が高いし、映画のシーンを自分のことに置き換えて見ていました。彼は教員試験に合格する予感がします。

また、Dさんは、経営者らしく、企業や町のイノベーションの視点で語り始めた。

////////////////////////////////////

(映画で語り合う風景 一部再現)

D：「岸部一徳演じる常磐ハワイアンセンターの本部長がダンサーの平山先生がどれだけ無礼な態度を示しても、平身低頭していたでしょ。また、先生から炭鉱まちの踊り子のレベルの低さに呆れられ、「外の女性を雇いなさいよ」と言われたときも頑として受け入れなかったですね。これは彼だけが、“町の再生や“雇用を守る”という目的を理解していたし、その目的を忘れなかったからの言動だったんだよね。多くの炭鉱夫は炭鉱会社に残り、従来の歴史や経験の呪縛にとらわれ、変わることが出来ず、抵抗勢力となっていた。確かにこれは決して攻められないし、彼らの正義もあったとは思う。逆に、女性は昭和三十年代、ダンサーに裸に近い格好で踊るというイメージがあった時代に覚悟を決めて応募していた。もちろん、生計を助けるためでもあり、踊り子になる覚悟は彼女らを早くプロになることへとつながったし、ハワイアンダンサーが成功した理由だったかもしれないね。女性は案外、会社での地位も与えられていないし、男性に比べて捨てるものが少ないから強いといえるかもしれないね。」

(映画での語り合い 一部風景再現)

////////////////////////////////////

このように映画での語り合いは人によって視点の違いがあり、自分では気づかない見方を教えてくれるものです。また、映画の内容はまさに情報の宝庫。『歴史、文学、文化、習慣、心理、風俗、法律、宗教、政治、経済、経営、家族、異文化、病気、傷害、社会問題、差別問題、女性問題など』様々なテーマが存在しています。また、登場人物の『おしゃれ、ウイットネスに富んだ会話』などのコミュニケーションのあり方や作り手の視点、例えば『監督の制作意図・狙いや脚本』など、ありとあらゆる視点で語ることができます。さらに参加する人それぞれの見方の違い、経験の違いが多面的・複眼的な見方

へと広げてくれます。このように様々な題材をもとに参加者の経験や考え方を語り合う場を持つことは人間を成長させる可能性を高めることを実感できました。